

季刊 | 120. 2007 春

國立民族學博物館 協力
2007年4月30日發行 第121卷第1期
總數120號 ISSN 0550-8220

民族學



民族学

〔目次〕

- 003 **特集 インド社会の現在**
もうひとつのFashioning India
写真=大村 次郷
- 012 目覚める「巨象」インド 杉本 良男
- 014 現代インドにおける民主主義 広瀬 崇子
- 015 経済発展とIT 古賀 正則
- 016 生業の近代化 IT革命と農村 安藤 和雄
- 020 郊外型ショッピングモールの登場 三尾 稔
- 024 道路を飼い慣らす
インド交通事情 三尾 稔
- 025 災害と観光 深尾 淳一
- 028 聖なる河と水質汚染 菅野 美佐子
- 029 カーストの現在 杉本 星子
- 030 ヒンドゥー祭礼の変容
インド北西部の事例 三尾 稔
- 032 仏教は消滅したのか
ネオブディスト考 島 岩
- 033 パールシー教
各界で活躍する教徒たち 杉本 良男
- 036 徒歩巡礼を楽しむ人びと 中谷 純江
- 040 キリスト教の受容 ゴアの事例 松川 恭子
- 044 イスラームとカースト 小牧 幸代
- 045 移動民ヴァギリ 岩谷 彩子
- 047 現代に生きるマハラジャ 池亀 彩
- 048 映画スターと災害復興 杉本 良男
- 049 クリケット
皆が熱狂する国民的スポーツ 杉本 良男
- 050 日本人にとってのカレー、
インド人にとってのカレー 小磯 千尋
- 052 テレビの多チャンネル化が示すもの 荒川 登子
- 053 結婚広告にみる
現代インドの結婚事情 杉本 星子
- 058 出産事情
変わるものと変わらないもの 松尾 瑞穂
- 060 朝食に暮らしあり7
世界でいちばん幸せな国の朝食 白川 千尋
- 062 **キリマンジャロの人びと**
辻村 英之
- 新連載
- 075 朝メシ前の人類学——フィールドでうまれる歴史
第一回 お金、あげちゃっていいんでしょうか?
文=松田 凡 写真=水井 久貴 イラスト=中川 洋典
- 080 海人万華鏡第7回
海のない漁港——九州・諫早湾で想ったことなど
living on as transformed entities
文=あん・まくどなると 写真=磯貝 浩
- 087 **砂漠に暮らし、
ラクダとともに生きる** 常見 藤代
- 101 書架はいざなう
ダンスは危険…… 西 洋子
- 102 本で会いましょう20 大森 康宏さん
日本の映像人類学の草分けとしてカメラを通して人生を語る
- 104 本棚
トナカイ遊牧民、循環のフィロソフィー
見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ!
- 105 国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ通信

生業の近代化——IT革命と農村

あんどうかずお
安藤和雄

京都大学東南アジア研究所准教授

ターバンを巻いた村人がベッドでノートパソコンを使いインターネットを楽しんでいる。これは *Impact of Internet on Society* (Deepak Kumar 著) という本の表紙である。二〇〇六年の出版で、アッサム州の州都ゴウハティの本屋で偶然求めた。他にも最近出版されたITもしくはCI (Communication Technology) 関係の英書が並んでいた。アッサムやアルナチャール・プラデシュ州の農村部をこ数年調査で訪れているが、この本に紹介されているような農民にはまだ出会っていない。開発が進んだ他の州では、現実の話なのだろう。

後進地域と分類されるアッサムや、アルナチャール・プラデシュでは、数個の村の中心地であるバザールで、PCO (Public Call Office) と看板掲げた公衆電話屋が目につく。数軒軒をならべていることも珍しくない。農業機械・化学肥料、農業の使用による農業技術の近代化のみならず、個人が主体となった「社会関係の近代化」は、商売や街への出稼ぎなど、雑業の増加を農村にもたらす傾向にある。出稼ぎに出ている家族や、商売相手との連絡など、個人的な情報のやり取りの必要性が、生業の変化とともに確実に増しているのだろう。

公衆電話屋の出現は生業の近代化と無関係ではない。インドの隣国バングラデシュでは、生業の近代化は、急速に進んでいる。一九八六年から通っているタンガイル県ジャム川氾濫原に立地するD村では、貧困層へのマイクロクレジット(無担保、低利子)による小口融資、汜

濫原で雨季に水没することのない土の道路調整備などにもない、週に一度開かれる土曜日の定期市のほかに、毎朝、バザールに市がたつようになった。材料調達と製品の運搬が容易になり、手編み魚網つくりの内職や、人力車引き、バザールでの普設小売店の増加、都市や外国への出稼ぎなども顕著にみられるようになった。生業の近代化は、生業の多様化をいつきに促進させた。そこに携帯電話が出現したのである。

インドと異なり、村のバザールの公衆電話屋には、「PCO」ではなく、「村電話」(「グラミンフォン」)はベンガル語で農村の意とかかれた看板が出ている。バングラデシュで普及している固定電話の九〇パーセント以上は都市部に集中し、新設には四年を待たねばならないという(CICCシンガポールニュース——南・東アジアにおけるITの話(五六号)) JETRO/CICCシンガポール 二〇〇六年二月九日発行)。この状況では、携帯電話がもつとも有効な情報伝達手段となる。この生業の社会状況変化と公衆電話が販売になるといちはやく気づいていたのが、二〇〇六年ノベル平和賞受賞者のムハンマド・ユヌース氏が創設したグラミン銀行である。一九九六年、許可申請をおこない、外資の支援も受け、携帯電話サービスを提供するグラミンフォン社(Gramphone)の株主となり、一九九七年、グラミン銀行による「貧しい女性たち」へのマイクロクレジット事業とグラミンフォン社の村電話プログラム(Village Phone Program)が

金融の借り手のための所得を生み出す仕組みとなる(同上三八ページ)とある。つまり、バングラデシュ伝統の、「女性が小額の融資で乳牛を育て収入を得る」という形態と、村電話プログラムの機能が類似していると述べている。

果たして、実際、どれほどの携帯電話が「第二の乳牛」となったか不明であるが、D村では一九九九年以来、携帯電話が利用できる公衆電話屋が四軒、菜屋やよろず屋の店先で開設された。しかし現在では、村電話の看板掲げた二軒のみが公衆電話屋を継続し開いている。店を閉めた理由は、電話がかかってくる客に知らせにかなければならず、手間がかかり本業の店の邪魔になったり、利益が思ったほどあがらないからだという。携帯電話のセットが、海外出稼ぎ者の土産や、値上げにより、急速に普及したためである。価格は、二〇〇五年年度以降、それ以前の一万タカ(一米ドル約六六タカ、二〇〇七年三月)近くという法外な値段から、二〇〇〇タカ〜四〇〇〇タカ台にまで下がった。公衆電話屋の主人は「儲けが以前の二〇分の一に減じた」と説明してくれた。一九九九年当時は月に四〇〇〇〜五〇〇〇タカあったものが、二〇〇七年に入り、五〇〇〜六〇〇タカほどになっているという。携帯電話の充電に必要な電気が、停電が多いとはいえ、村に行きわたったことも影響している。二〇〇七年二月の調査では、六〇〇世帯前後の村に二六四台の携帯電話が所有されていた。そのうち二〇〇五年以前に購入されたのは八台である。外国出稼ぎ者との連絡を必要としていた大口利用者が携帯電話を個人でもつよつよになったことが影響している。D村では近年サブシアラビアやマレーシア、イタリヤなどへの出稼ぎ者が多く、二〇〇六年一月の時点で、五二名を数えた。ダッカなど

の都市で勤める人も確実に増えていると推察される。

携帯電話事業には二〇〇五年末現在、グラミンフォン社の他五社が参入し、全国での加入者数七五〇万人となった(CICCシンガポールニュース 同上)。グラミンフォン社の二〇〇五年年次報告によれば、加入者は二〇〇二年の七十七万人から二〇〇五年には、五五〇万人に増加している。バングラデシュでは、ノキア社の世界共通SIMカード方式によるセットが多く使用され、六〇〇、三〇〇、一〇〇、五〇、二〇タカのカード販売によるプリペイド方式(よく使われているのは三〇〇、五〇、二〇だ)という、一般的なとなっている。もはや、村での携帯電話はラジオ以上

に身近な存在となりつつある。テレビ、冷蔵庫も増え、衛星放送のサービスも販売として始める村も出てきている。IT革命とは、情報における「都市化」である。すでに、バングラデシュの携帯電話各社は、携帯電話をモデム端末として使えるインターネットサービスを開始し、利用者が急増しているとグラミンフォンのサービス店に聞いた。遠からず、農民がベッドの上でインターネットや衛星放送を楽しむ姿がバングラデシュの村でも現実となる。

一方、いまも伝統的な景観を保ち、子どもの声や青年たちの姿が溢れている村がバングラデシュにはまだまだ多い。日本や東南アジアでは、情報とインフラ整備による「都市化」は村人を都市にひきつけ、「過疎化」をおしすすめる

た側面を免れない。私はバングラデシュやインドには、この方向とは違った可能性を感じている。バングラデシュの村人は、都市に引つ張られるばかりではない。頻繁な連絡やITの暮らしへの取り込みは、村人の気持ちの中に村の存在がいまだ際立っていることの証でもある。

「村を捨てない」のである。ここに私は期待している。インド、特にバングラデシュの農村で起きている携帯電話、インターネット、衛星放送など、ITが作り出している世界は、まさに、「村を捨てずに都市と共生をはかる実験」である。「IT革命」という名に値するであろう。これまで誰も考えもつかなかったような村の暮らしや社会、生業を世界に先駆けて出現させる可能性を秘めている。



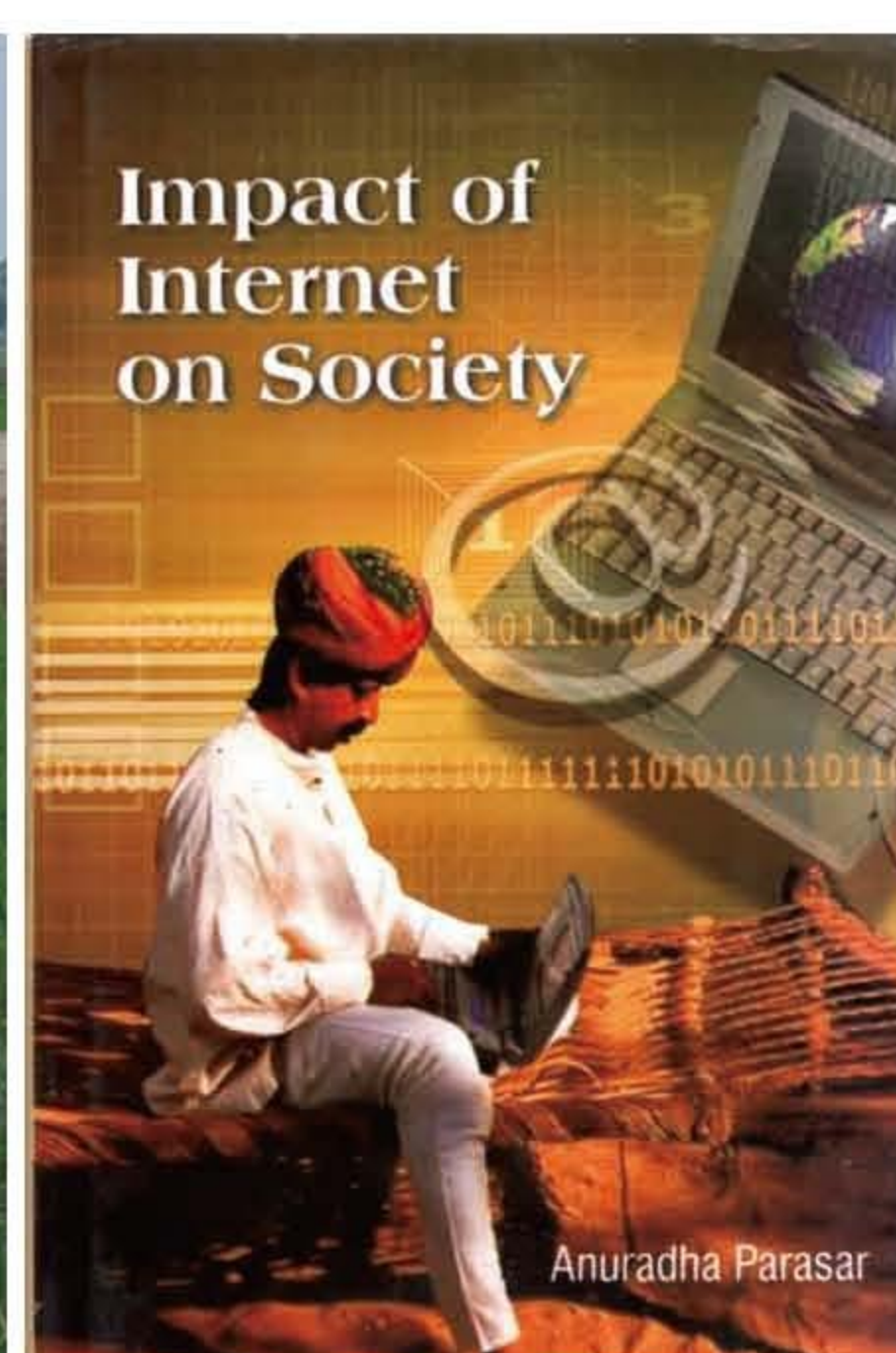
1986年、アメリカの半導体企業テキサス・インスツルメンツが選出して以来、IBMなどの大手IT企業がいるインドの「シリコンバレー」



手で食事する建設労働者の後ろには、ハイテク機能をもつ建物が見える。



右: Impact of Internet on Society (Deepak Kumar 著) の表紙 中: D村の雨季にも水浸しない土の道路。撮影・安藤和雄(2007年3月)
左: D村のバザールでの朝の市(ハット)。撮影・安藤和雄(2007年3月)



右: グラミンフォン社の村電話の看板(グラミン銀行、銀行加入者の名前がある)。撮影・安藤和雄
中: グラミンフォン社1998年次報告書「村電話プログラム」の項に掲載された写真
左: D村の落ち着いた村の景観(緑は乾季の灌漑稲作。まるで、ひとむかし前の雨季の景観である)。撮影・安藤和雄(2007年3月)

